

キャス・サンステイーン著 (田沢恭子訳・斎藤誠解説)

『最悪のシナリオ—巨大リスクにどこまで備えるのか』

(みすず書房、2012年)

鈴木 真

本書は Cass R. Sunstein, *Worst-Case Scenarios* (Harvard University Press, 2007) の邦訳である。壊滅的な損害を引き起こしうるリスク因子に対してどのように考え対処すべきか、という問題を扱い、その一般的枠組みの導入を目指している。特に、重大で不可逆的な被害の恐れある場合には、科学的証拠が十分にはなくても、予防的措置を講じるべきだ、という予防原則と、費用便益分析の兼ね合いを検討している。M9の東日本大震災、それに引き続く津波、そして福島第一原発事故と、それに対する備えのなさや対処の難しさを見た後では、こうした理論的問題も身近に感じられよう。サンステイーンは基本的には科学的知見に基づく費用便益分析を重視するが、金銭的価値というより効用(幸福・不幸)を基本的価値としてとらえ、しかも純粋な功利主義とは違い公正の分配の重要性も重視する。彼はこうした費用便益分析によって支持される限りで予防原則(より厳密には、その一解釈)を正当化する。

この種の帰結主義的な考え方を嫌忌する人々も多いだろうが、そうした方々にも本書を読んでみることをお勧めする。サンステイーンの立場は綿密な議論により支えられており、費用便益分析に対する批判にも答えようとしている。彼の立場を最終的に退けるとしたところで、彼の議論から学ぶことは多く、またその主張を反駁することが生易しいことではないことがわかるだろう。

*Nudge: Improving Decisions about Health, Wealth, and Happiness* (Yale University Press, 2008: 邦訳『実践行動経済学—健康、富、幸福への聡明な選択』(遠藤真美訳、日経BP社、2009))を Richard H. Thaler と共に著しているサンステイーンらしく、本書でも人間のリスク認知にバイアスがあることを指摘しつつ、その前提の下で政策の適正さの問題が検討されている。テロの問題から環境問題ま

で、その射程は広く、不可逆性や人命の金銭価値化や世代間の公正と時間割引の問題など関連する理論的論点にも重要な貢献をしている。もちろん、サンステイーンの帰結主義的枠組に対立する義務論的立場からの批判と予防原則のより広範な適用の擁護の余地はあるだろう。また帰結主義陣営の内でも、例えば彼が奉じているように見える効用のリスク中立性(期待効用が等しい帰結は、等しい価値を持つ)に対する批判はありうる(たとえば、John Broome, *Weighing Goods—Equality, Uncertainty and Time*—(Oxford University Press, 1991))。私としては、日本のリスクに関わる分野の研究者と、政策関係者の多くに本書が読まれ、サンステイーンの議論とその批判が多方面から検討されることを願う。